

# 手と手と手

岡山発 国際貢献

昨年十月、持続可能な開発のための教育（ESD）の国際会議が岡山市で開かれたとき、地域の環境改善に取り組み、岡山市京山地区ESD環境プロジェクト（KEEP）に参加している中高生らが活動もよぶを発表して以来、注目度が増している。

「あの若者たちの未来が楽しみだね」

四月中旬、横浜市で開かれた国連キャンペーン「ESDの十年（二〇〇五〜一四年）」を推進する地域拠点（RCE）の世界会議で再会したタイのアジア工科大学教授マリオ・タブキヤンは笑顔で語った。オランダの放送大学職員ジョセフ・ライカーも「若者はESDの重要な主体。若者を育てている岡山はすばらしい」と興味深げだった。

## 大学の役割

しかしながら、問題がないわけではない。「大学が出遅れている」。世界会議の会場で、岡山ESD推進協議会長の青山勲（六三）岡山大学教授Ⅱがつぶやいた。世界的に見ると、多くのRCEでは、大学がリーダーシップを持ち、プログラム開発や市民教育を進めているが、岡山はその認定を受けながら、自治体とNGO（非政府組織）が中心。大学の存在感が薄い。KEEPにも大学の関与はほとんどない。

少子化、国際化が進み、日本の大学は生き残りをかけた激しい競争の中にある。文部科学省の大学教育改革を支援する予算は本年度五百六十二億円で、前年より約三十億円増。大学改革にESDを導入

する大学も少しずつだが出遅れている。岡山大学院環境学研究所は昨年、文科省の大学院改革事業として「いのちをまもる環境学教育」に取り組んでいる。同事業の柱の一つであるESDの担当チームに青山は所属している。

岡山大学院環境学研究所は昨年、文科省の大学院改革事業として「いのちをまもる環境学教育」に取り組んでいる。同事業の柱の一つであるESDの担当チームに青山は所属している。事業が採択された昨秋から学内の体制づくりに着手した。しかし、ESD学習を企画しても参加者はまばら。学内の関心が低い。青山はESDの実施体制を



世界の大学関係者らがESDを地域で推進する戦略を議論したRCE世界会議＝4月、横浜市

強化するため、ESD教育機関としてユネスコの認定を受けることを大学に提案した。今年二月から、他の教官とともに、ユネスコ・パリ本部やすでに認定を受けているドイツの大学を訪ねて調査。四月、申請にこぎつけた。「定年まであと二年。なんとか軌道に乗せたい」。青山は力を込める。

認定されれば、来年度から三年間、同研究科は実際に地域の団体や学校と連携し、教材開発やリーダー育成に取り組み。途上国などの連携も進めていく。実績は毎年、ユネスコに報告することも義務づけられる。

「Do not preach. Act.」(説教しない)行動せよ。最近、ESD研究者らが口にする言葉だ。ESDはそれぞれの地域で構築されるものだけに、地域の大学に期待されている役割は大きい。多くの大学が集積する岡山は、大学の行動が、ESDの未来像につながる。(敬称略)

体制を急ぐ岡山大に対し、岡山理科大では昨年か

ら一つのESDプロジェクトが動いている。教官有志でつくる環境教育地域支援研究会が、岡山市の足守中、一宮高と取り組む笹ヶ瀬川水系の総合調査。一年で水質、地質、生物、植物など多様なデータが集まった。二年目の今年は、データを地域住民や大学生の環境教育に生かすことが課題だ。「行動することで、地域の問題が明らかになるはず。地道に続けていきたい」と、代表の野上祐作理学部教授は言う。

# 説教しないで行動せよ

第6部おわり。清水玲子が担当しました。